

## 国境離島の地域文化振興のための地域資産評価研究

研究年度 令和 3年度

研究期間 令和3年度～令和4年度

研究代表者名 河又 貴洋

共同研究者名 松尾晋一、下野孝文、関谷融、  
李炯喆、福島涼史、田村善弘、植村百江

### I. はじめに

本学大学院修士課程に「国境離島文化振興コース」が開設されて2年目の完成年度に、本コースの担当教員による人文・社会科学分野の「総合知」（歴史学・宗教学・文学・政治学・法学・地理学・地域経済学・社会経済学・文化人類学）たる調査研究を開陳すべく、五島列島及び壱岐・対馬に渡る島々を調査対象としながら、当地にてセミナー・研究会を開催して、広く地域住民との「総合知」の共有を図るものとして本プロジェクトは計画されたものである。しかしながら、新型コロナウイルスのパンデミックも2年目にかかり、第4波からデルタ株が急感染拡大となり、東京オリンピックの延期開催と同期する事態となり、当初予定していた五島列島での現地調査・セミナー開催を実施することができなかった。幸いにも本年度11月には第4波も静まり、社会情報学会（SSI）主催の研究会を壱岐・対馬の両市をオンラインで結んで開催できる運びとなり、本プロジェクトとの連携を図ることができた。また、11～12月にかけては離島地域イベントも開催され、島外からの渡航制限も緩和され、五島市の奈留島に11月に新規開設された「奈留島世界遺産ガイドセンター」を見学するとともに奈留島島民による企画参加の「サンタラン」イベントにも参画する機会を得た。さらに、新上五島町の人口減少対策有識者会議が12月下旬に開催され、その機に奈留島と歴史的にも文化を共有する若松島の視察を行うことができた。本報告は、限られた現地調査を手掛かりに、人文・社会科学分野の「総合知」による離島地域の資産をいかに再認識評価すべきかの視座を提供するものである。

### II. 研究内容

「国境離島文化振興コース」のカリキュラムに組み込まれている専任教員の開講科目（以下「」表記）を基盤に、長崎の国境離島を調査対象とした文化を含む地域資産についての多面的な価値評価を複合化することで、地域振興に寄与すべく地域資産の有効利活用を示唆するところに本研究の特色がある。なお、多面的な価値評価の視点は以下の通りであり、現地調査がコロナ禍で制約される中、文献調査を中心に各自、担当科目の内容拡充に取り組んだ。

◇ 「地域・離島文化特論」：離島歴史遺産調査（松尾晋一）

地域・離島における、その特有な環境から醸成された種々の属性について、その形成過程から、

また現在も継承されている文化的背景を歴史学の方法論に従い検証する。地域社会に残る遺跡や史資料から歴史・文化の特異性を抽出し、今日的「地域・離島文化」の背景を考察し探る。

- ◇ 「地域・離島文化特論」：離島文学遺産調査（下野孝文）  
 地域・離島における、その特有な環境から醸成された種々の属性について、その形成過程から、また現在も継承されている文化的背景を文学の方法論に従い検証する。口承文芸からはじまる文学史的な展開を資料等の精読による通時的理解を通して、文化を形成する要素としての役割について考える力を養成する。
- ◇ 「離島教育支援特論」：離島教育環境調査（関谷 融）  
 コンピュータ及び遠隔授業設備を含むICT環境を知能拡張（IA: Intelligent Amplifier）ツールと捉えなおし、離島教育現場が抱えてきた少人数化に伴うハンディキャップを縮減する方策・方略を検討考察する。
- ◇ 「国境離島史特論」：国境離島地政学調査（李炯喆）  
 今日的「国境」概念を日本が取り入れたのは、ロシアとの関係から19世紀後半である。その段階から「有人国境離島法」が制定されるまでを視野に入れ、日本における境界問題の歴史的展開を政治史の視点から辿る。
- ◇ 「国際法特論」：離島振興調査（福島涼史）  
 領域帰属等を巡る争点を把握し、整序するために必要な国際法の基本的原理を理解することから始め、国際交流と国際協調に高度な専門性をもって貢献するための知見を得る。そのために、国連海洋法条約を中心とする海洋法等の歴史と現代的展開を追う。さらに、ライフライン、医療や教育など地域の逼迫した課題を、人間の安全保障など国際平面で論議されてきた枠組みにおいて捉え直す。
- ◇ 「地域食文化特論」：離島食文化調査（田村善弘／石見百江）  
 食文化の視点から地域振興を考えるうえで必要となる知識を身に付けることを目的とし、「地域」、「伝統」、「フードシステム」をキーワードに、地域の食文化について理解を深める。
- ◇ 「離島社会情報特論」「離島経済ネットワーク特論」：離島地域ネットワーク調査（河又貴洋）  
 国境に位置する離島は島嶼群を形成しながら独自の歴史文化を発展させてきたが、そこには島嶼間のみならず本土間とのネットワーク形成が不可欠であった。交通手段のみならず情報通信のネットワークとともに交易・交流・情報伝達のネットワークの整備発展に伴う社会経済圏の形成について、ネットワーク理論を踏まえながら考察する。

なお、今年度の取組みとして、社会情報学会（SSI：Society of Social Informatics）が主催する「SDGs と社会情報学～持続可能な社会構築のための情報学を島から考える～」をテーマに長崎県

の壱岐・対馬両市をオンラインでつないだ研究会（実証・政策部門：公開）に参画する機会を得て、本プロジェクトのみならず本学大学院の地域社会マネジメント専攻の院生も参加し、調査研究とともに教育に資することとなった。ここでの主題は持続可能な開発目標が示唆する地域の社会文化活動のあり様をいかなる価値転換によって再構築するかの示唆を与えるものであった。さらに本研究会で壱岐市を訪問した際、現地調査として印通寺港地区を視察し、松永安左エ門記念館を訪れ、日本の近代史に名を刻んだ“電力の鬼”の功績を確認する機会ともなった。このことは、離島地域における人材の輩出とその志を継承する地域文化の在り方を考察することにもなった。

また、新型コロナウイルス蔓延防止策が緩和された11月～12月の時期に開催された五島市奈留島の地域イベント「サンタラン」に参加し、地域住民のイベントに寄せる思いと参画の意義を地域コミュニティ形成の観点から考察する事例を得ることができ、同時に世界遺産にも登録されている江上教会（「サンタラン」のゴール地点）の地域における存在と新設されたガイダンスセンターでの郷土史閲覧マルチメディア施設を視察した。併せて、奈留島で実施されている「しま留学生」制度に取り組む「しまなみ隊」（地域おこし協力隊）のメンバーからも、離島留学生の学生寮「しまなび舎（や）」においてヒアリング調査も実施した。この現地調査にあつては地域文化の振興が地域住民のアイデンティティと彼らのともに生きるコミュニティの在り方に示唆を与えるものとなった。

加えて、12月中旬には新上五島町の若松地区に「キリシタン洞窟」を視察に赴いた。「船でしか行くことができない上五島巡礼の聖地」としての「キリシタン洞窟」はキリシタンへの迫害の歴史を、海からのアクセスという離島の自然の中で営まれる「生きること」を体感するとともに、その歴史の重みを今に甦らせる。また、厳冬期（観光シーズンのオフ・シーズン）ではあつたが海上タクシーの出航地である若松港のエリアに滞在し、現在の若松地区の在り様を港と海からの展望により視察した。

## 1.1.1. 研究結果

### 1. 長崎県と島嶼における遺産（自然・文化）

長崎県の島嶼地域にはさまざまな遺産が公的機関によって認定されている。それらは自然資本（遺産）と文化資本（遺産）に大別することができるであろうし、自然のなかには人間を含む生物（生命）があり、生態系は風土を醸成し、ヒトは文化を形成する主体である。この観点から、日本国内および国内指定は長崎県下で指定されている遺産を列举すれば以下のものがある（          ：島嶼地域）。

#### 【自然遺産】

- 世界自然遺産（World Natural Heritage）～国際連合教育科学文化機関（UNESCO）～環境省：  
知床（2005年）／白神山地（1993年）／小笠原諸島（2011年）／屋久島（1993年）／奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島（2021年）
- ✓ 観賞上、学術上又は保存上顕著な普遍的価値を有する特徴ある自然地域、絶滅の恐れのある動植物の生息地など
- 国立公園～国際自然保護連合（IUCN）～環境省：雲仙天草国立公園（1934年）／西海国立公園（1955年）…西海・外海多島海景観・切支丹遺跡：九十九島、烏帽子岳、弓張岳、黒子島、阿値賀島、平戸島、生月島、五島列島

- 国定公園～環境省／都道府県：玄海国定公園（1956年）～壱岐対馬国定公園（1968年）
- ユネスコ世界ジオパーク～（UNESCO）：洞爺湖有珠山／アポイ岳／糸魚川／隠岐／山陰海岸／室戸／島原半島（雲仙火山：2009／2015年）／阿蘇／伊豆半島
  - ✓ 地球科学的な価値を持つ遺産（大地の遺産 geoheritage）を保全し、教育やツーリズムに活用しながら、持続可能な開発を進める地域認定プログラム
- 日本ジオパーク（九州）～NPO 法人日本ジオパークネットワーク（JGN）：島原半島（2008年）、天草御所浦／阿蘇（2009年）、おおいた姫島／おおいた豊後大野／桜島&錦江湾（2013年）／天草（エリア拡大・名称変更：2014-2020年：管理運営団体の解散により消滅）／桜島（2021年）／五島列島（下五島エリア：2022年）
- 世界農業資産（GIAHS: Globally Important Agricultural Heritage Systems）～国際連合食糧農業機関（FAO）／農林水産省：トキと共生する佐渡の里山（2011年）／能登の里山里海（2011年）／静岡の茶草場農法（2013年）／阿蘇の草原の維持と持続的農業（2013年）／クヌギ林とため池がつなぐ国東半島／宇佐の農林水産循環（2013年）／清流長良川の鮎一里川における人と鮎のつながり（2015年）／みなべ&田辺の梅システム（2015年）／高千穂郷&椎葉山の山間地農林業複合システム（2015年）／持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システム（2017年）／静岡水わさびの伝統栽培－発祥の地が伝える人とわさびの歴史－（2018年）／にし阿波の傾斜地農耕システム（2018年）
  - ✓ 社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接に関わって育まれた文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）

#### 【文化遺産】

- 世界文化遺産（World Cultural Heritage）～国際連合教育科学文化機関（UNESCO）／文化庁：法隆寺地域の仏教建造物（1993年）／姫路城（1993年）／古都京都の文化財（京都市、宇治市、大津市、1994年）／白川郷&五箇山の合掌造り集落（1995年）／原爆ドーム（1996年）／厳島神社（1997年）／古都奈良の文化財（1998年）／日光の社寺（1999年）／琉球王国のグスク及び関連遺産群（2000年）／紀伊山地の霊場と参詣道（2004年）／石見銀山遺跡とその文化的景観（2007年）／平泉 - 仏国土（浄土）を表す建築／庭園及び考古学的遺跡群 - （2011年）／富士山 - 信仰の対象と芸術の源泉 - （2013年）／富岡製糸場と絹産業遺産群（2014年）／明治日本の産業革命遺産〈製鉄・製鋼、造船、石炭産業〉（2015年）／ル・コルビュジエの建築作品 - 近代建築運動への顕著な貢献 - （2016年）／「神宿る島」宗像&沖ノ島と関連遺産群（2017年）／長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（2018年）／百舌鳥&古市古墳群 - 古代日本の墳墓群 - （2019年）北海道／北東北の縄文遺跡群（2021年）
- 文化財～文化庁…我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産～「文化財保護法」：国宝，重要文化財，史跡，名勝，天然記念物等
  - 国宝：〔建造物〕大浦天主堂／崇福寺大雄宝殿／崇福寺第一峰門（1953年）
  - 重要文化財（島嶼及び長崎キリスト教関連抜粋）：〈対馬市〉対馬宗家関係資料（2012年）／朝鮮国告身（1974年）／梵鐘（多久頭魂神社、1975年）／銅造如来立像（海神神社、1974年）

／銅造如来坐像（黒瀬観音堂、1981年）／梵鐘（旧清玄寺、1974年）／〈**壱岐市**〉高麗版大般若経（安国寺、1975年）／〈**長崎市**海外〉出津教会堂（2011年）／旧羅典神学校（1972年）／旧出津救助院（2003年）／大野教会堂（2008年）／黒島天主堂（1998年）／〈**五島市**〉銅造如来立像（明星院、1981年）／旧五輪教会堂（1999年）／江上天主堂（2008年）／〈**新上五島町**〉銅造如来立像（極楽寺、1981年）／青砂ヶ浦天主堂（2001年）／頭ヶ島天主堂（2001年）他全63件

- 国指定重要無形民俗文化財：**壱岐神楽**（1987年）／**五島神楽**（2016年）／**下崎山のへトマト行事**（五島市、1987年）／**平戸神楽**（1987年）／**平戸のジャンガラ**（1997年）／大村の郡三踊（寿古踊・沖田踊・黒丸踊、2014年）／長崎くんちの奉納踊（1979年）
- 国指定天然記念物（**島嶼地域関連抜粋**）：**斑島玉石甌穴**（1958年）／**黒子島原始林**（1951年）／**阿値賀島**（1976年）／**へご自生北限地帯**（五島市、1926年）／**奈良尾のアコウ**（1961年）／**男女群島**（1969年）／**辰の島海浜植物群落**（壱岐市、1967年）／**鰐浦ヒトツバタゴ自生地**（対馬市、1928年）／**御岳鳥類繁殖地**（対馬市、1972年）／**ツシマヤマネコ**（1971年）／**ツシマテン**（1971年）／**龍良山原始林**（対馬市、1923年）／**洲藻白嶽原始林**（対馬市、1923年）／**奈留島権現山樹叢**（1958年）他全36件
- 国選定重要文化的景観：**佐世保市黒島の文化的景観**（2011年）／**平戸島の文化的景観**（2010年）／**小値賀諸島の文化的景観**（2011年）／**五島市久賀島の文化的景観**（2011年）／**長崎市海外の石積集落景観**（2012年）／**新上五島町崎浦の五島石集落景観**（2012年）／**新上五島町北魚目の文化的景観**（2012年）
- **日本遺産**（Japan Heritage）～文化庁：（**長崎県関連を抜粋**）「**国境の島 壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋**」（長崎県）／「**鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～**」（広島県・神奈川県・長崎県・京都府）／「**日本磁器のふるさと 肥前～百花繚乱のやきもの散歩～**」（佐賀県・長崎県）
- ✓ 地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー

これら保護・継承・伝承されるべき自然環境・文化伝統として、登録認証された有形・無形の遺産を鳥瞰すると、そこに島嶼という固有の自然環境（隙間：ニッチ *niche*）に育まれた独自の文化（生活習慣：ハビタット *habitat*）を創出していることが浮き彫りとなってくる。とりわけ、日本列島の周辺を取り巻き、よって他国領域との境界に位置する島嶼群は中核をなす本土（本島）から周辺（周縁）に配し、豊かな水産資源と限定的ながら逞しい生態系を包摂する陸地が海岸線で融合し、豊饒な漁場を生み出す一方で、大自然が織りなす絶景は美観をもたらしている。

しかしながら、今日の気候変動に見られる温暖化の急速な進展は、科学的にも認知されるようになり、環境破壊に対する関心は「持続可能な開発」（Sustainable Development）の言葉に象徴されるように、われわれ人類の生息域の破壊にもおよび、人類が地球の地質や生態系に与えた影響が無視できない「人新世」（Anthropocene）という地質時代の区分概念まで提唱されるに至っている。

## 2. 「SDGs と社会情報学」研究会@壱岐対馬 からの示唆

「持続可能な開発」の観点に立ち、文化振興をいかに捉え、どのような評価軸をもって評価・検討す

べきかを考察するに当たり、社会情報学会の定例研究会として壱岐・対馬市を会場としてオンラインで11月13日（土）に開催された研究会は、両市の実務者を交え、有効な視座を与えるものとなった。その研究会の内容は、文理にわたる学術学会の横断型基幹科学技術研究団体連合（通称、横幹連合）の機関誌『横幹』（第16巻第1号）に「解説/Review」として掲載されることになり、詳細はそれに譲ることとするが、本プロジェクトとの関連から、以下の重要な示唆を得られたことを報告する。

本研究会の企画に当たり、なぜ壱岐・対馬が会場となったのか。日本遺産の「**国境の島 壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋**」（長崎県）にも認定されている当該地域は、内閣官房・内閣府が主導する地方創生「ひと・まち・しごと」事業における「SDGs 未来都市」（壱岐市：2018年、対馬市：2020年）に選定され、地方自治体主導の取り組みを積極的に展開している。

- ◇ 壱岐：「一支国(いきこく)」の王都「原(はる)の辻(つじ)」は、大陸との海上交易で栄えた国際交流都市の先駆け ～ **壱岐活き対話型社会「壱岐(粋)な Society5.0」**
- ◇ 対馬：古代から地理的に近い朝鮮と交易をしてきた対馬では、日朝両国の平和を象徴する外交使節団・朝鮮通信使の足跡をたどることができる ～ **対馬市 SDGs 未来都市計画「サーキュラーエコノミーアイランド対馬」**

そして、これらの地域は、島という地理的自律・独立性を有し、独自の文化・環境生態系において生活圏を形成しながら、他地域との連結性を要する島嶼ではその生活圏は循環型社会を実感しうる地域でもあり、自然環境の変化と持続可能な環境に対してセンシティブであるとともに、少子高齢化の人口動学・社会構造の諸問題に地域として取り組む地場を有している。その点で、国際連合が掲げる「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals: SDGs）として17の目標に、人類が対処すべき課題の参照軸をもって自らの地域の自然環境保護と文化振興を、日々の現実的生活圏の中で感知・認知し、自然（物理化学的）環境と社会（人為的）環境から得られる「価値」を再認識・構築して他者との共有を図るに適した地域と考えられる。

ここで重要な点は、ストックホルム大学のレジリエンス・センターが提示する「SDGs のウェディングケーキ」でその土台となる環境（自然資源）となる「生物圏」の上に、われわれ人類は「社会」を形成し、その社会の中で「経済」的営みがなされており、その中軸を貫いて、「パートナーシップで目標を達成しよう」（目標17）が掲げられているが、その中軸をなす価値基準をそれぞれの地域でどのように共有するかが課題である。

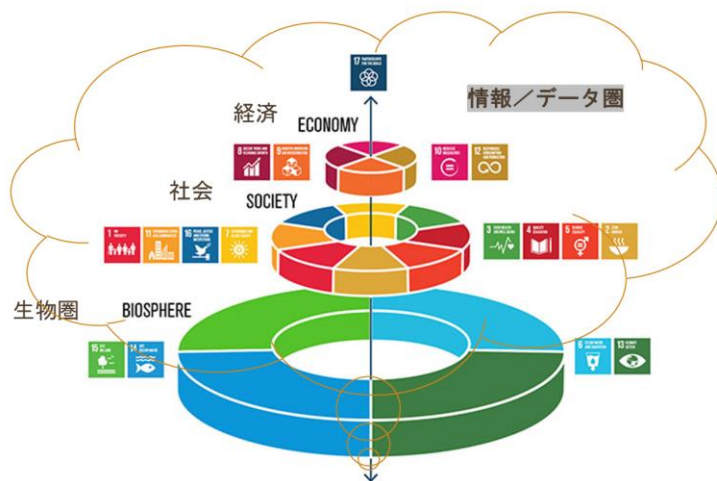


図1. SDGsのウェディングケーキ

出所) Stockholm Resilience Centre's (SRC) contribution to the 2016 Swedish 2030 Agenda HLPF report, Stockholm, February 2017 より加筆

この点を別の角度から参照してみれば、内閣官房の地方創生「まち・ひと・しごと」を捉えることができるであろう。「まち」は自然環境「生物圏」の中に構築され、そこに「ひと」が「社会」を形成し、「しごと」をもって「経済」活動が営まれる。この三層構造は三つ巴の構造でもあり、巴が結集するところに文化が醸成される。すなわち、文化こそが価値の基準となり、その文化圏の中で価値共有がなされる。となれば、文化変容は価値機軸の変換（トランスフォーメーション）と言えるものであり、今日SDGsをもってCO2排出に起因する温暖化や生物多様性喪失といった自然界における変動により、それぞれの文化圏での価値変換が求められている。しかるに、地域は重層的な歴史の上に立ち伝承されてきた文学を共有する地盤として、近代的な法と政治の枠組み構築により、社会的価値の権威的配分を行い、衣食住を伴う生活においては市場と政府を介した経済的価値の配分を行うメカニズムにおいても文化的価値基準に影響を受けている。

図2は、地方創生の「まち・ひと・しごと」の概念を各種の資本（文化・社会的関係・人的・ネットワーク・金融・自然）に関連付け、その基底に社会的共通資本、すなわち自然環境（大気、水、森林、河川など）、社会的インフラストラクチャー（道路、交通機関、上下水道、通信インフラなど）、制度資本（教育、医療、金融など）の3つの範疇によって、各資本が形成される。そこに、「まち・ひと・しごと」を結び付けるところにサイバー空間が展開されるが、その展開軸に（文化的）価値基準が据えられるものとする。



図2. 「まち・ひと・しごと」の源泉である「資本」と「場」

出所) 河又（2018年）「地域の“情報場”をめぐるコミュニティ構想に向けて」  
横幹〈地の統合〉シリーズ編集委員会編（2018年）所収，p.39より

さらに、地域創生の「まち・ひと・しごと」を今日における「SDGsのウェディングケーキ」に照合すると図3に示すように、経済活動における価値機軸の変換を促す企業の社会的責任（CSR）からESG投資（環境・社会・統治）が推進される中で、地域においても地域文化の再認識・再構築が望まれることでもある。その展開が成長の加速主義を標榜するグローバル都市型となり得るのか、「脱成長コミュ

ニズム」のローカル地方型を目指すべきなのか、都市と地方の連携ないし動的平衡の在り方をも視野に入れた価値（基準）の創造デザインが構想されるべき時代ともいえる。

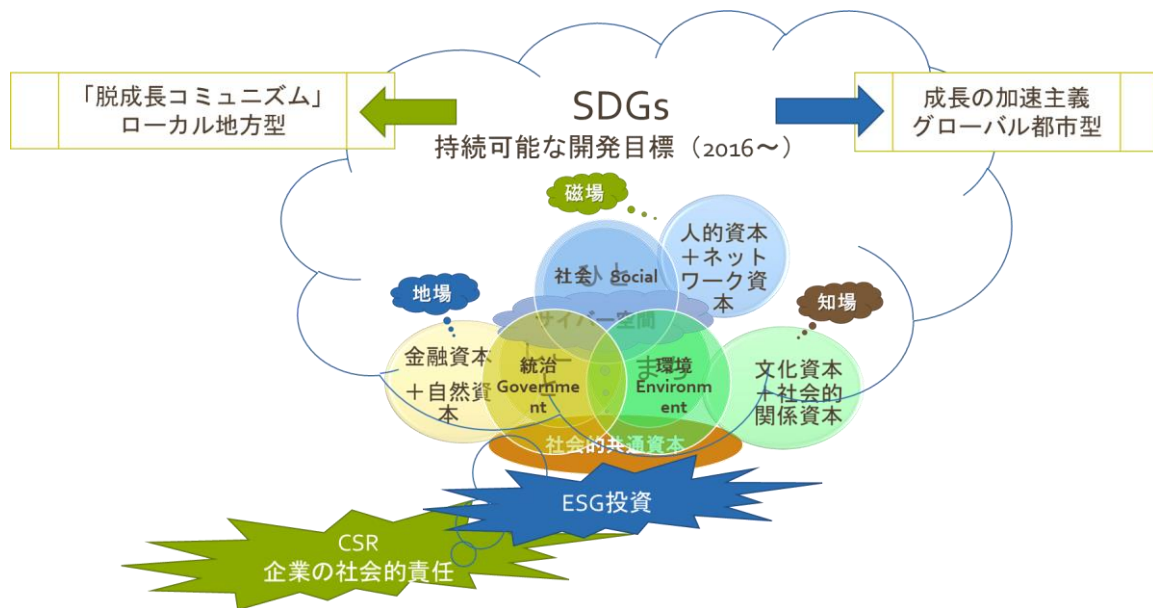


図3. 地方創生「まち・ひと・しごと」から「SDGs 未来都市」へ

そこでは、ブライアン・ウォーカーが提唱する社会生態系とレジリエンス（復元力）思考の概念をもって、地域文化を生態学的動的平衡を形作るとのとして理解する必要があるかもしれない。レジリエンス思考とは、概念1：「私たちは皆、システムの中にいる」つながりの中のアクターであるということ、概念2：「私たちの属するシステムが、複雑適応系であることを理解する」ことで、システムに難中の介入をしたとしても応答を正確には予測できないという前提に立ち、概念3：「レジリエンスは持続可能性の鍵である」という観点から、外部からの攪乱に見舞われた際に招かれざる不足の事態を避ける能力を説くものであり、人文・社会科学の「総合知」を地域の文化振興に還元する所在がここにある。

「海洋性」(Oceanic)、「狭小性」(Smallness) および「遠隔性」(Remoteness) といった島嶼性 (insularity) は概して、環海 (閉鎖) 性、分断性、孤立・拡散性といった負のイメージで捉えられがちであるが、生態環境的視点に立てば、独自性、連結可能性、耐用性といったレジリエンスの根本原理を文化の中に宿してきたとも言えまいか。海洋文化 (海からの視点) は島嶼研究における文化理解にとって欠くことのできない「まなざし」として人文・社会科学の「総合知」を必要としている。本研究プロジェクトの更なる展開がその一助となることを期待するものである。

#### Ⅳ. おわりに

価値の評価軸の提示による文化振興の在り方をさらに、人文社会科学の「総合知」を結束させることで、長崎県下の国境離島における自然・文化資産を自然・文化資本として島民の生活環境基盤を醸成し、島外からの移住・移労 (ワーケーション・出張・派遣)・移動 (ビジター・旅人)・遠隔 (リモート・オンライン) での種々の関係性を通じて共有・伝承・伝播される文化的価値の根幹と支柱を構築する手掛かりを得るに至り、今後さらに国境離島に固有の新たな価値観をもって「価値の創造」から「価値の誘



導」への展開を図るべく、「国境離島文化振興コース」での調査研究を拡充する所存である。それは、資源としての自然・文化スポット（モノ）の背景および文脈形成による地域文化の物語（コト）を紡ぐことによる「アート」（芸術・文芸・工芸・民芸）の「キュレーション」（情報の収集・分類・整理から編集・企画立案・表現展覧の運用）に関わる価値創造の技法（技芸）の構想となり得るものである。

## 【参考文献】

- 宇沢弘文（2000年）『社会的共通資本』岩波新書。
- 横幹〈地の統合〉シリーズ編集委員会編（2018年）『ともに生きる地域コミュニティ超スマート社会を目指して』東京電機大学出版局
- 大澤真幸（2021年）『新世紀のコミュニズムへー資本主義の内からの脱出』NHK出版新書。
- 嘉数啓（2019年）『島嶼学 Nissology』古今書院。
- 河口真理子（2021年）『SDGsで変わる経済と新たな暮らし』生産性出版。
- 河又貴洋（2018年）「地域の“情報場”をめぐるコミュニティ構想に向けて」横幹〈地の統合〉シリーズ編集委員会編（2018年）『ともに生きる地域コミュニティ超スマート社会を目指して』東京電機大学出版局所収，pp.31-42.
- 北川フラム（2014年）『美術は地域をひらく 大地の芸術祭10の思想』現代企画室。
- （2015年）『ひらく美術：地域と人間のつながりを取り戻す』ちくま新書。
- 九州大学ソーシャルアートラボ編（2018年）『ソーシャルアートラボー地域と社会をひらく』（文化とまちづくり叢書①）水曜社。
- （2021年）「アートマネジメントと社会包摂ーアートの現場を社会にひらく」（文化とまちづくり叢書②）水曜社。
- 文化庁×九州大学共同研究チーム編（2021年）「文化事業の評価ハンドブックー新たな価値を社会にひらく」（文化とまちづくり叢書③）水曜社。
- 後藤和子・勝浦正樹編（2019年）『文化経済学ー理論と実践に学ぶ』有斐閣。
- 暮沢剛巳（2021年）『拡張するキュレーションー価値を生み出さず技術』集英社新書。
- 斎藤幸平（2020年）『人新世の「資本論」』集英社新書。
- 田中輝美（2021年）『関係人口の社会学ー人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会。
- 電通 abic project 編 若林宏保・徳山美津恵・長尾雅信 著（2018年）『PLACE BRANDING プレイス・ブランディング：“地域”から“場所”のブランディングへ』有斐閣。
- 中川忠・森正人・神田孝治（2006年）『文化地理学ガイダンス』ナカニシヤ出版。
- 広井良典（2009年）『コミュニティを問いなおすーつながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書
- （2019年）『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社。
- 森正人（2021年）『文化地理学講義ー〈地理〉の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社。
- 山口誠・須永和博・鈴木涼太郎（2021年）『観光のレッスンーツーリズム・リテラシー入門』
- 山下祐介（2021年）『地域学入門』ちくま新書。
- Walker, Brian (2006) *Resilience Thinking: Sustaining Ecosystems and People in a Changing World*, Island Press. （ブライアン・ウォーカー著／黒川耕大訳『レジリエンス思考』みすず書房，2020

年)

構成については、自由。

個人研究は下記書式を原則。

A4 縦（上余白 35mm、下余白 30mm、左余白 30mm、右余白 30mm。40 文字×30 行）。

MS 明朝。タイトル（研究テーマ）14pt、本文 11pt。

番号の体系は「I. 1. (1) 1」を採用

（参考）

- ・ はじめに
- ・ 研究内容
- ・ 研究成果
- ・ おわりに
- ・ 注記・参考文献等